Research Institute for World History

Newsletter

No. 30　September 2017

世界史研究所「ニューズレター」
第30号（2017年9月）

CONTENTS

■ 合評会　MINERVA 世界史叢書『総論「世界史」の世界史』 — 1頁
■ 合評会にあたって　南塚信吾 — 2頁
■ 書評
■『「世界史」の世界史』を読む　木畑洋一 — 3頁
■「世界像」検討のおもしろさ—『「世界史」の世界史』論評　橋川健竜 — 6頁
■ 世界史教育の課題と『「世界史」の世界史』　日高智彦 — 10頁
■ コメント
■『「世界史」の世界史』を読んで考えたこと　小谷汪之 — 12頁
■「世界史」再構成の課題　松本彰 — 15頁
■『「世界史」の世界史』を読んで：若干の感想　深澤安博 — 18頁
■『「世界史」の世界史』コメント　百瀬宏 — 20頁
■『「世界史」の世界史』合評会—歴史教育からの視点　松本通孝 — 20頁
■『「世界史」の世界史』コメント　吉嶺茂樹 — 22頁
■『「世界史」の世界史』書評と紹介　澤野理 — 23頁
■ 合評会を終えて　南塚信吾 — 24頁

■『新しく学ぶ西洋の歴史』合評会　南塚信吾 — 27頁
■ RIWH アフリカ奨学基金（第5期）授与の報告 — 29頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

合評会

秋田茂、永原陽子、羽田正、南塚信吾、三宅明正、桃木至朗編
MINERVA 世界史叢書『総論「世界史」の世界史』
ミネルヴァ書房、2016年

2017年2月19日（日）、世界史研究所会議室において、2016年にミネルヴァ書房より刊行された『総論「世界史」の世界史』の合評会が開催されました。本書には、世界史研究所所長南塚信吾も編者の一人として参加しています。その合評会は、歴史研究者による批評だけでなく、高校の世界史教員からの提言もあって、多角的な考察の場となりました。以下、当日の報告と、その後の議論をふまえたコメントを掲載します。

合評会にあたって

南塚信吾（世界史研究所所長）

2016 年 7 月に、ミネルヴァ書房より刊行予定のシリーズ「MINERVA 世界史叢書」の最初の巻が出版されました。

まずこの叢書について一言。この叢書は、これまでのわが国における世界史を反省して、新たな世界史を構築することを目指すもので、これまでの世界史が、世界の国民国家史や地域史の寄せ集めであったり、自国史を除いた外国史であったり、欧米やなんらかの「中心」から見た世界史であったりしたことへの反省を踏まえたうえで、近年の歴史研究の成果を取り入れて、それらの限界を突き破ることを目指すものです。「世界史叢書」は、全体として以下のような構成を取ります。

総　論　「世界史」の世界史
第一期　世界史を組み立てる
第二期　つながる世界史
第三期　人類と世界史
第四期　文化の世界史
第五期　権力と秩序の世界史

さてその最初の巻が、『総論　「世界史」の世界史』と題された本書です。この巻は、第一部において、これまでわれわれ人類は、西欧のみならず、世界各地においてどのような「世界像」を描いてきたのかを点検しています。第二部では、そういう世界各地の「世界像」のなかから、ひとつの「世界像」が西欧において、今日われわれが受け入れている「世界史」として体系化されてきたという問題を扱います。１８世紀末以来現在まで、われわれはどのような「世界史」をもっているのか、啓蒙主義、実証主義、マルクス、世界システムなどの「世界史」を取り上げて、その「世界史」の特徴や問題点はどこにあるのかを批判的に総点検しています。そして、第三部で、その問題点を乗り越えて、われわれの時代の世界史を作るにはどうするか、旧来の「世界史」に代わるべきオルターナティヴな展望を示すことを目指しています。

なにしろこういう試みの本はこれまでほとんどなかったわけで、編者としても試行錯誤であったわけで、今回のものも決して完成版ではなく、いわば出発点のようなものです。各方面のご批判を頂いて、よりよい世界史の構想の仕方を考えていくことができればよいと思います。

今日は、三人のかたにコメンテーターをお願いしていますので、まず三人のかたのご発言を頂いて、そのあと、みなさんで自由にご議論いただくようにしたいと思います。

書　評

『「世界史」の世界史』を読む

木畑洋一（成城大学）

1 本書のねらいと構成について

この野心的なシリーズの最初の巻として本巻が出されたことをまず評価したい。ここで出された諸論点が、シリーズ全体でどのように追求されるか、楽しみにしている。

本書のねらいは、「これまでわれわれ人類は、世界各地においてどのような「世界像」を描いてきたのか、その後、われわれは現在どのような「世界史」をもっているのか、そしてその「世界史」の特徴や問題点はどこにあるのかを総点検し、その問題を乗り越えるオルターナティブな展望を示す。」（p.1）とされている。そして、第Ⅰ部において古代からの各地域での世界像が検討され、第Ⅱ部で近代以後に体系化された世界史が論じられた後、総論が置かれてヨーロッパ中心の世界史へのオルターナティブの提起がなされる、という構成がとられている。

この構成全体について中心的問題となるのは、世界像と世界史（像）の関連である。各地域でさまざまな世界像が存在したなかで、世界史への展開をみせたのはヨーロッパの世界像のみである、というのが本巻での議論の基調となっており、そこで指摘される要因が、世界像における時間軸のあり方と、内在的批判の論理の存在という点である（p.4）。それはヨーロッパにおける普遍史から世界史へという形で表現されているが、その点に関わって、イスラームについても普遍史が語られている（p.182）ことに注意したい。イスラームを扱った章で、そのような点についての敷衍が全く行われていないのは、残念である。

各地域での世界像と近代以降の世界史像との関連は、本書の構成でいえば第Ⅰ部と第Ⅱ部の関連ということになる。そこで問われなければならないのが、第Ⅰ部で扱われた世界像が近代以降どのようになっていったのかという点である。序論では、「そのような「世界像」が、現在においても諸地域の人々の歴史観に依然として影響を与えているかもしれない。･･･これらの「世界像」は、まだ消滅はしていなくて、現在においても、なんらかの形で残り、おりにつけて登場してくるものでもある。」（p.2）と記されており、さらに非ヨーロッパの世界像にあった価値を活かした世界史の構想の可能性も考えられているようであるが（p.7）、それについての議論が十分に成されているとは思えない。評者は、このような第Ⅰ部と第Ⅱ部の関連が、本書に接して最も気になった。その点は後でも述べることにしたい。

2　本書各部分の内容について

以下、今少し具体的に本書についてのいくつかの感想を述べる。

1)　第 I 部の中国、インド、ギリシアなどを扱った章について

第 I 部で扱われている地域や対象の内、日本、中国、インド、ギリシア、キリスト教、イスラームにおける歴史意識は従来も論じられてきた。たとえば、相当前のことになるが、1970 年代初めの『岩波講座世界歴史』第 30 巻（岩波書店、1971）の場合は、以下のような章立てになっていた。

歴史意識の展開：1 ヨーロッパにおける歴史意識（堀米庸三）、2 西アジアにおける歴史意識（護雅夫）、3 インドにおける歴史意識（荒松雄）、4 中国における歴史意識（西嶋定生）、5「第三世界」における歴史像—行為としての歴史（山口昌男、ちなみにこの章は本来山口氏と板垣雄三氏の両氏が執筆することになっていたという）

この各章で、ヨーロッパ、西アジア（イスラーム）、インド、中国での前近代における歴史意識が論じられ、さらに第三世界についても議論が展開されていた。

それに比べてみると、これらの地域を扱う本書の各章は、かなり個性的な内容をもっている。ただしそれだけに若干特論的性格が強すぎるのではないかという感を抱かざるをえない。そのことは、すでに触れたイスラームについての章の場合、とりわけ強く感じられる。

第 I 部の内、特に日本を対象とした第 1 章では、本書で世界像を議論する場合に意識されているさまざまな要因が、比較的満遍なく取り上げられていると感じたことも付け加えておきたい。その要因は以下のようなものである。

世界像の特徴（仏教的世界像と儒教的世界像）/ 時間認識（神世と人世）/ 空間認識（日本的華夷意識）/ 超越的契機（中国由来の「天」）/ 批判契機（蘭学の影響）/ 現在との関連（明治維新の意味）/ 他地域との関係（インド的世界像の影響・中国由来の「天」）

2)　第 I 部のその他の章について

第 I 部のその他の章については、かなりの新味を感じた。

第 4 章では日本・朝鮮・ベトナムがまとめて扱われているが、世界像の共通性に着目してこのような構成の章を置いたことの意味は大きい。ただそれだけに、議論の対象となっている時代にずれがあることを、特に日本と朝鮮の場合について、若干残念に思った。

アイヌを扱った第 9 章、メソアメリカについての第 10 章、サンの例に関する第 11 章は、非常に目新しく、強い興味をもって読んだ。ただし、アイヌの時間意識がどのようなものであったか、メソアメリカとサンの空間意識がどのようなものであったかなど、本書全体の議論をより完全なものにしていくために求めたい点も、目についた。

3)　第Ⅰ部から第Ⅱ部へのつながりについて

すでに述べたように、本書を読んで評者が最も強く感じたのは、第Ⅰ部から第Ⅱ部へのつながり方を、今少し意識してもらいたかったという点である。

それについての留意は、第Ⅰ部全体に求められる。ただし、第6章から第12章へ（ヨーロッパでの普遍史から世界史へ）はうまく接続していると思う。

第Ⅰ部のなかで第Ⅱ部へのつながりを例外的にはっきりと論じているのは第10章（メソアメリカ）であり、メソアメリカが植民地になっていったなかで世界観が変容をとげてキリスト教的歴史像と矛盾しない先住民史が構築されたこと、にもかかわらず現在でもメソアメリカ的要素が存在していること、について触れている。詳しく論じる必要はないものの、こうした形で近代以降の世界像の変容の問題について、他の章でも述べてほしかった。たとえば中国についての第2章では、「この表層の下には、今なお伝統的な心性が潜んでいるやもしれない」（p.51）とあるが、それについてさらに論じることはできなかったであろうか。

4)　第Ⅱ部について

第Ⅱ部の各章はヨーロッパ中心の世界史像の姿と来歴を十分に論じている。第Ⅱ部を読んで感じたことは、それを論じる内容が近年になって大きく変化したことである。たとえば、本書との比較で先に引き合いにだした旧版の『岩波講座世界歴史』では三つの章があてられていたマルクス主義に一つの章が割かれているものの、その位置づけは軽く、総論に至っては、唯物史観は「これまでの世界史」（p.394）と片付けてしまっている。

第Ⅱ部でさらに興味深く思った点として、近代日本の万国史をめぐる第14章での、西洋中心主義の万国史に対置されるアジアの視線からの万国史の掘り起こしという論点がある。まさに西洋中心主義に対するオルターナティブとして、その可能性はいかほどのものだったのだろうかという疑問が生じてくる。

5)　総論「われわれが目指す世界史」について

同一筆者による辛口の第17章の後に置かれた総論は、よくまとまったものとなっている。グローバル—リージョナル—ナショナル—ローカルという各層を往復するような世界史像が求められているという主張や、ナショナルな契機も否定されているのでなく相対化されているのだという指摘など、強く首肯できる論点である。

ただし、オルターナティブの世界史についてどこまで具体的な像が結べるかという点では、満足できる議論がなされているとは思われない。「主役や中心、強者が存在するようなしくみそのものやそこから世界を見るやり方、いわば「中心中心主義」を否定しなければならない。」（p.408）という議論については、「中心」の存在を否定することと「中心中心主義」を否定することの違いを論じる必要があると思われるし、「全体像」と「個別研究」の関係も、課題として残っている。

3　全体として気にかかった点について

1)　ヨーロッパ中心主義的世界史浸透の要因

ヨーロッパ中心主義的世界史像が世界を席巻していったのは、ヨーロッパ側がもっていた力によるところが大きいが、同時にヨーロッパ中心主義を受け入れていった側の問題点を検討する必要がある。繰り返しになるが、第Ⅰ部と第Ⅱ部のつながりが、この点でもやはり問題となる。

2)　グローバル・ヒストリーの位置づけ

近年流行しているグローバル・ヒストリーを本シリーズにおいて世界史との関係でどう位置づけるかが気になるが、本書ではその点についてあまり触れられていない。グローバル・ヒストリーは社会史および国民国家批判と並ぶ歴史学の三大潮流である（p.374）という位置づけや、グローバル・ヒストリーを社会史、言語・表象・メディア研究と並べる議論（p.401）、さらにグローバル・ヒストリーに対して日本の学界に強い拒否感があるという観察（p.385 n.26）などを桃木至朗氏が行っている位のものである。この点については、本シリーズ全体に期待したい。

「世界像」検討のおもしろさ—『「世界史」の世界史』論評

橋川健竜（東京大学）

『「世界史」の世界史』は、世界の歴史が各地でどのように構想されたか、また歴史学の問題として世界史を今後どのように構想しうるか、を問うている。第一部では計 11 の章が、近代歴史学以前にさかのぼって各地における世界史像ないし世界像の輪郭を検討している。対象とした地域、時期、史資料、分析方法のいずれにおいても、評者だけではなく、数多くの近現代史研究者が目を見開かされるだろう。また第二部の計 7 章は、おおよそ 18 世紀以降の一体的な世界史構想の主要概念を、主に日本の近現代歴史学の歴史と重ねて振り返っている。この作業には類例がなくはないが、これほど世界史の一体性にこだわった論集はあまりない。

第二部については多くの論評が現れると思われるので、本稿では二点に触れるにとどめる。まず、第 14 章で特定の地域を世界史の展開の中心と位置づけない史書と論じられている『パーレイ万国史』について、評者が専門とするアメリカ合衆国史の見地から情報を補足したい。ピーター・パーレイ（本名サミュエル・グッドリッチ）の刊行した書籍の多くは、今日では地理書と位置づけられている。実は、1830 年代にアメリカで刊行された『パーレイ万国史』の原著も、地理書の上に歴史の記述を重ねたものと考えられるのである。19 世紀前半にはペスタロッツィ式の教育法がアメリカに導入

されていて、暗誦にもっぱら頼るのでなく、五感、特に視覚を通じて対象に接近させる教育が一部で実施されていた。美術館や博物館には、地理書を手に地球儀を回しながら世界地理を学習する少女たちを描いた当時の絵画や、生徒たちが実際に制作した手製の地球儀が保存されている。それらは『パーレイ万国史』原著刊行当時の文脈を窺わせてくれる（むろん、同書が日本でいかなる意図でどう使われたかは、これとは別の問題である）。

次に、世界史構想の現在と未来への留意を論じた第 17 章と末尾の総論については、評者は論点の多くに賛同するものの、それが史学科の存在を前提しているように見える点が気にかかった。今日では、近現代を対象とする研究者のかなり（もしかすると多数？）が、大学では史学科ではなく、現代社会研究や国際文化研究など、学際性の強い学科に所属している。史学科と同じ形で世界史と歴史学を教授・研究することは、これらの学科では困難である。教員有志がネットワークを作って歴史学の問題設定や分析のあり方を集合的に教育・研究するとしても、それを学科全体の教育カリキュラムと有機的な関係に置けないならば、結局、歴史学の教育・研究には脆弱性が伴うだろう。各大学の学科や学部の学問的重心がどこに置かれるかは、もとより歴史研究者だけで決められることではない。だがこうした諸学科でも、網羅的でないにせよ、一定の世界史構想を学部生と大学院生に提示して研究を推奨する体制を考案する努力の必要性や、そのレベルで歴史学を活性化する方法も、言及してもよかったように思われる。以上をもって第二部へのコメントとし、以下では第一部に話を絞りたい。

本書第一部では歴史学や宗教思想史はもちろん、人類学、口承文学研究、比較文学などの研究者も参加して、ユーラシア大陸各地の数多くの集団、またアフリカとメソアメリカを取り上げ、時代的には紀元前から 17 世紀までをカバーして、一部は 20 世紀を含む。世界像の構築が近代実証史学の基準に適っているかどうかはここでは検討対象でなく、たとえば、伝説が史書の記述においてしばしば重要な役割を担っていることが指摘される。世界像を論じる材料として、史書のほかに宗教典籍が論じられ、絵文書が扱われ、口承文学もあれば民話も用いられる。多様な史料の多様な分析で描かれる世界像の多くは、神ないし超越的な存在と自分たちの関係が軸となっている。天地創造を歴史の始点とする（キリスト教普遍史）、世界の中心に須弥山を置く（日本）、四方に宇宙樹を想定する（メソアメリカ）、自然に神々を見出す（アイヌ）、などの例を挙げうる。だがこの点については比較を控えたい。どのような理由・考え方に基づいて、事例ごとにいかなる存在が神（神々）とみなされたのか、という問題をはじめ、評者の能力を超える宗教学的検討が必要になる。

歴史研究者にとって興味深いのは、自分たちと他の人間集団との関係が世界像に断層や境界を作りうること、また複数の世界像の間で競合が生じうることが、どう描写・分析されているかであろう。確固とした世界像も通時的変化の観念も持たない存在として、南部アフリカの狩猟採集民サンが取り上げられ、「他者」を設定して自己を定義する必要が

なかったと説明されるが、これは例外的存在のようである。また口承文学を題材にアイヌの世界像を扱う章は、アイヌは和人と自分たちの間に線を引いたものの、神々とアイヌ、神々と和人の関係を比較すると、両者の間には大きな差異は見出されないと論じる。文字を持たなかった集団の抱いた世界観に積極的な独自性を見出していく分析姿勢は、たとえば西洋近現代史を専門とする読者にとっても、関心を刺激されるところである。他方、アイヌと和人の関係には、ここで言う「大きな差異」を生ぜしめうる契機はあっただろうと想像される。また、時代とともに新しい素材がどのように口承文学に消化され、世界観を拡張させていくのか、という分析も期待したかったが、前近代の口承文学史料の入手は容易ではないのだろう。

アイヌについての章も含め、多くの章は自集団の世界像に他集団がどう位置づけられるかを重視している。またその位置づけ方が、自民族の生得的な優越、他集団の生得的な劣等という、自民族中心主義的な形をとるかどうかにも注意を払っている。特に明快な分析枠組みを提示しているのは、ヘロドトス『歴史』を論じる古代ギリシア論である。『歴史』の扱うアジア・リビア・ヨーロッパという空間の広がりと、そこにおける人間集団の分布、また提示される情報の質が論じられ（ちなみにいずれの記述でも、ジェンダーの扱いが多く取り上げられる）、それを扱うヘロドトスの姿勢が、後続世代のアテナイの著述家が展開した反バルバロイ言説と対比される。ヘロドトスが実見できた地域についての記述と、辺境の想像世界に関する、伝承のみに基づいた記述の間には質的な違いが見出せるが、ヘロドトスは後者については「伝承を採取したままに記録」したこと、またオリエントの君主をめぐっても、彼らの地域自体に専制的体質があると決めつけず、君主のヒュブリス（横暴）を権力そのものにつきまとう問題として論じたこと、が指摘される。この点で『歴史』には「文化的相対主義」に通じる個性があるという。分析対象の史料が絞り込まれていること、またヘロドトスが周辺的存在として扱った側から見た史料がおそらく存在しないこと、のゆえに論考としての紹介と分析も整理された可能性はあるが、この章の分析枠の設定は、他の章を読む際にも参考になる。ちなみに本章では、アテナイにかんするヘロドトスの情報源の多くはオーラルなものだった、という学説を紹介している。ここに見られる情報源と記述の関係を、上記のサンやアイヌの事例を考える際にも参考にすることはできるのだろうか。評者には判断する能力がないが、興味深かった。

実際には、一つの世界像において周辺に位置づけられる集団も、自らを中心的存在とした別の世界像を築いている可能性がある。両者の間の現実の力関係が、それぞれの世界像に影響を及ぼしている。東アジアを扱う３つの章はその関係性の複雑さを描いていて、併せて読むと理解が深まる。特に日本・朝鮮・ベトナムを並列して扱う章は、三地域はそれぞれ自らを中心と位置づけたいものの、中国の影の下にあっていずれも完全に独自の観念体系を作り出すことができず、結果として「小中華」として別個に世界像を形成していったことを、その程度の差に注意を払いつつ説得的に論じている。中国の側については、中華概念や華夷秩序の一般

的内容がすでによく知られているという理由だと思われるが、時系列的な中華概念の来歴を紹介している。この概念は早くは六朝時代に現れるが、重要な画期は宋代で、特に北方異民族に対する宋の相対的劣勢が刺激となって、その観念体系が精緻化されたことが強調されている。専門家には周知のこととはいえ、この世界像が生成・彫琢された理由は東の藩属諸国や日本ではなかったことが確認される。東アジアでは中心と周辺がかみ合わないまま並存していたことが浮かび上がるだろう。

世界像における中心と周辺の関係の最も極端な事例は、メソアメリカであろう。スペインによる征服の結果、先住民は自己の世界の中心からキリスト教普遍史の周辺的存在へと、自己理解も含め変化を余儀なくされたのである。メソアメリカを扱う章は、どちらかというと先住民の世界像の紹介に紙幅を割き、征服後については被征服世代が生きた時期に議論を限っている。具体的には、彼らがナワトル語による記述（絵文書が有名だが、征服後にはアルファベットを用いて標記されるようになった）をキリスト教普遍史にどのように接続したか、またスペイン側による歴史記述を彼らがどう微修正したか、が短く紹介されている。十分に価値のある指摘だが、短いのが残念である。また、18 世紀後半にかけて混血のメスティーソを含め先住民の子孫が、またクリオーリョが、スペイン語も用いて征服前の世界をどう評価していったかという別の問題も（最もよく知られる例はグアダルーペの聖母）、論考末尾で一言触れて良いように思われた。他方で、西半球世界との接触がキリスト教普遍史を揺るがしたことも、興味を引く。キリスト教普遍史を扱う章は多くの情報を手際よく紹介していて感銘を覚えるが、この点にいま少し触れる紙幅が許されていたなら、と思われる。ちなみにこの章の著者は別著で、ホセ・デ・アコスタが先住民の来歴を普遍史の枠に収めて解釈し、普遍史を護ったことを紹介している。

イスラームを扱う章では、周辺との関係のほうが世界像の中心の描写よりも重視され、後者はあまり論じられない。二つの章があてられているが、一つの章は遠征で知られるアレクサンドロスにかんする記述が『クルアーン』はもちろん、10 世紀までのイスラームの史書にどう扱われたかを検討している。イスラームに先行したササン朝ではアレクサンドロスは暴虐な征服者として否定的な扱いを受けた。しかしその後、史書ではない『クルアーン』の宗教説話に「二本角」として性格を異にした言及があるなど、別の理解も生まれた。この章は、さらに下って 8 世紀から 10 世紀の史書ではアレクサンドロスが次第に列王伝に組み入れられる、という大きな変化があったことを指摘し、それをイスラーム世界の王朝の興亡の流れと、また歴史記述の発展と関係付けている。イスラーム普遍史自体がキリスト教普遍史の枠組みを部分的に共有していたことを考えれば、諸要素の流入と変容がイスラーム研究の重要な潮流となることは理解できるし、手堅く論じられるアレクサンドロス像の変遷はそれ自体興味深い。ただし、分析する事象を絞り込んだ結果として、イスラーム史書の構成、そこに見られる世界像の一体性ないし全体的な構造、またその時代ごとの変遷は、議論の対象になっ

ていない。

もう一つの章は中央ユーラシアの遊牧民族の世界像を扱う中で、イスラーム史書の中に遊牧民族の歴史が収録されたことを、遊牧民族の側から論じている。モンゴル史の第 1 巻とイスラーム普遍史の第 2 巻を設け、簡略なヨーロッパ史の記述も含んだ世界史書として知られるラシードゥッディーン『集史』がここで取り上げられ、伝説上の人物への言及によってモンゴルとイスラームとが関係付けられたと論じている。進出してきた周辺を中心と比肩する存在に位置づけた事例として興味深い。ただしモンゴル帝国以後のイスラーム史書については、遊牧民族の側が世界宗教の権威を援用しようとしたことが指摘されていて、中心と周辺の関係は事例ごとに大きな差異が見られる。遊牧民族がチベット仏教など、他の宗教的世界観にも自らの歴史を組み入れていったことも紹介されている。この章の重点は主要な史書の紹介を通じてこうした多様性を示すことと、それを貫く遊牧民側の目的意識——血統の確認——を指摘することにあるが、それゆえイスラーム史書の記述の方針に関する通史的な整理はなく、アレクサンドロスの章と同じく、イスラームの側について一般化しにくい。これについては優れた先行研究が複数存在するし、またイスラーム「世界」という有機的、統一的なまとまりを前提することの是非をめぐって議論があるようだが、本書では他地域の世界像・歴史像との比較のためにも、多少の議論があったならと感じる。

以上、ないものねだりのコメントを加えつつ、第一部を中心に不十分ながら若干の整理を試みた。章によっては長い期間、また広大な空間と多数の集団を扱うため、紙幅の範囲内では事例を連ねて論証を行えなかった箇所もあるだろう。その分、読む側が細部に目を配る必要がある。だがそれを措いても、各章が時に人類学など隣接諸分野にも踏み込んで論じたさまざまな世界（史）像理解からは、今日の歴史研究の主要なアプローチといえる「人間集団同士の接触」について、ひと味違った洞察をえられる。これらの各章は、何を専門とする読者にも、世界や歴史の認識のあり方について、考えるきっかけを与えてくれるだろう。そして、本シリーズでは今後、世界史構想の各論を扱う計 15 冊の論集が予定されていると聞く（本稿の執筆時点で、第 1 巻『地域史と世界史』が刊行済み）。各論に先駆けて総論として本書が刊行された意義を、最後に強調しておきたい。各巻の刊行ごとに読者は本書に立ち返り、各論と世界像や世界史像を突きあわすことができるのである。

世界史教育の課題と『「世界史」の世界史』

日高智彦（東京学芸大学／合評会当時は成蹊中学・高等学校）

MINERVA 世界史叢書（全 16 巻）の配本第一巻である『「世界史」の世界史』は、シリーズの総論として、今後の各巻が描く「新たな世界史像」が何をめざしているか、その展望を示すために編まれている。南塚信吾執筆の序論によれば、これまでの「世界

史」は、①世界の国民史や地域史の寄せ集め、②自国史を除いた外国史、③欧米やなんらかの「中心」から見た世界の歴史、であった。その限界を突き破るために、前近代におけるさまざまな「世界像」と近現代における「世界史像」をつづく諸論文が検討して問題点をあぶり出し、今後「われわれが目指す世界史」の方向性として、(A)「中心」を廃した「世界史の見取り図」(B)「個別研究」に裏打ちされた「全体像」、(C) 人文学を方法・組織面で突破する、の３つを終章である総論で打ち出している。

この試みについて、以下では高校世界史教育に携わる立場から評してみたい。次期学習指導要領において、世界史は必修科目から外れ、歴史総合が新設される。これは世界史の消滅となるか、それとも日本史と世界史の統一的把握となるか。岐路に立つ高校世界史教育の課題から本書を評することで、「われわれが目指す世界史」を「われわれが目指す世界史教育」に架橋したいと思うからだ。

まず、「これまでの世界史」についての本書の３つの診断は、「これまでの世界史教育」の反省としても妥当性をもつと考える。とりわけ、生徒にとって世界史が、②「自国史を除いた外国史」である問題は大きい。スマートフォンを通じた常時接続の人間関係のなかで、「つながりを煽られる」高校生（土井隆義『つながりを煽られる子どもたち—ネット依存といじめ問題を考える』岩波書店、2014 年）には、世界史は自分の生活とは遠い外国のことと受けとめられがちである。そうであるならば、「われわれが目指す世界史教育」の方向性は、(a) 生活上の課題を生徒が主体的に考えてみたくなる内容について構想すること、(b) 身近な問題を、自分が暮らす地域、日本、そして世界の動きと関連づけて考察すること、の２つが考えられるだろう。

では、(a)・(b) にとって、「われわれが目指す世界史」の３つの方向性（A)・(B)・(C) はどのような意味を持つだろうか。まず、(a) にとって (A)「中心を廃した世界史の見取り図」は必要条件ではあるが、十分条件ではないだろう。各地域の人びとの具体的な実情とそのちがいについて知識を持たない生徒に「見取り図」を示すだけでは、生徒にとって世界・社会を自分で考える「見取り図」とはならず、暗記に陥る可能性があるからだ。よって、歴史総合がかつての日本史と世界史を融合させながら２単位に時間が半減したことを、「歴史総合では見取り図を教えればよい」という方向で解決しようとしても、うまくいかないだろう。

むしろ、(B)「個別研究に裏打ちされた全体像」が重要になってくるのではないか。桃木至朗によれば、日本の歴史研究者の「個別研究」水準の高さは過度の実証主義に支えられており、「全体像」や「見取り図」は実証の緻密さのたりない空理空論の「飛躍」として忌避される傾向があるという（本書 17 章)。しかし、「飛躍」は研究水準を落とすのだろうか、と毎時間の授業で「飛躍」している世界史教育の側から問題提起したい。例えば、本書に続いて刊行されたシリーズ二巻目『地域史と世界史』第７章の渡辺美季「1872 ～ 73 年の那覇—イギリス船ベナレス号の遭難事件から見た「世界」」は、琉球側の記録がほとんど残っていないためよく知

られていなかったイギリス船遭難事件を、渡辺が当時の外務省管轄下の琉球史料とイギリス史料に当たって具体的に復元し、これを 1872 ～ 73 年当時の世界の文脈に位置づけることで、主に日本史のトピックとして中等教育でもあつかわれる琉球処分を「われわれが目指す世界史」として見事に描き出している。この「飛躍」は、考古学との共同プロジェクト—すなわち (C)「人文学を方法・組織面で突破する」—による成果であり、空理空論ではない。

ここから示唆されるのは、高校世界史教育においても、まず個別具体的な事実・状況を学ばなければ自分で考える手がかりとならない、ということだ。そして、それを学べば、渡辺論文における琉球と明治政府のちがいのように、地域や立場の異なる人びとの間にある対立や矛盾に気づくことになる。その構造が「全体像」や「見取り図」ではないだろうか。この点では、同じく『地域史と世界史』責任編集者の羽田正の主張におおかたうなずけるものの、こうした対立や矛盾に一緒に取り組むために「相違よりは共通性や連関性により注目したい」（羽田『地域史と世界史』第 3 章、74 頁）とする点には、どうしても違和感が残る。

この違和感は、(b) の理解の仕方にも関わってくる。「身近な問題を、自分が暮らす地域、日本、世界の動きと関連づけ」るというとき、「横」のつながりが意識されることになるだろう。グローバル・ヒストリーの力点はここにあるし、だから本書も、前近代の「歴史意識」ではなく「世界像」を取りあげているのだ、と理解している。しかし、世界史教育にとっては「縦」も重要になることを強調しておきたい。「つながりを煽られる」生徒たちは閉鎖的な時空間を生きており、ゆえに次々に矛盾が噴出する現代世界の「変わらなさ」は、彼らが世界への関心を閉じるに十分である。であるからこそ、各時代に生きた人びとが、時代・社会に立ち向かい、これを変えてきたことを学ぶことが必要だろう。そうすることで、生徒は世界史の学習から、自分の人生のあり方を考えていくのではないか。

コメント

『「世界史」の世界史』を読んで考えたこと

小谷汪之（東京都立大学名誉教授）

1 「第 I 部　さまざまな世界像」にかんして

「第 I 部　さまざまな世界像」を読んで、強く感じたことは、知識人によって理念的に構成された「世界像」と、ごく普通の生活人がもっていたであろう歴史や時間についての感覚との間の乖離という問題である。

第 1 ～ 3 章で描かれている日本や中国やインドの「世界像」はあくまでも知識人、中国の文人やインドのバラ

モンたちの脳裏に描かれた「世界像」であって、普通の生活人がその中で生きていた歴史や時間の感覚とはかけ離れたものであろう。

特に、インドの場合は、両者の間の乖離がきわめて大きかったと思う。バラモンたちが描く「誇大妄想」とでもいうべき「世界像」が、ごく普通の人々の生活世界にまで浸透していたなどということはありえない。私が史料を広く読んでいる 16 ～ 19 世紀のマラーターの人々にとって、歴史とは、「あの大飢饉があった年」、「マラーター王国宰相（ペーシュワー）が村に来た年」、「あの家が村に住み着いた年」といった過去の記憶として刻みこまれているものである。それが、彼らの生きた歴史あるいは時間なのである。

このような乖離は、第 6 章で描かれた「キリスト教的世界像」についてもいえることであろう。そこに描かれた「世界像」と、例えばギンズブルグの『チーズとうじ虫』に描かれた粉ひき職人の「世界像」とを比べてみれば、両者の間の乖離は歴然としている。

その点で、「第 9 章　アイヌの世界像」や「第 11 章　サン（ブッシュマン）の世界像」の場合は、このような乖離が小さいということができそうである。

このように考える時、「さまざまな世界像」を列挙するだけではなく、それら「さまざまな世界像」の間に存在する質的相違を歴史学的に分析する作業が行われていたならば、もっと有益だったのではないかと思う。

2 「第 II 部　近現代の世界史」にかんして

「第 II 部　近現代の世界史」に収録された諸論文は、西欧近世に淵源する「世界史」が、その後のさまざまな展開を経て、しだいに、多くの人々によって受け容れられるような（カッコなしの）世界史になっていく歴史過程を示しているように思われる。「第 12 章　啓蒙主義の世界（史）観」や「第 13 章　実証主義的『世界史』」で描かれた「世界史」が、そのまま、今日、多くの人々によって受け入れられているのでは決してない。その間には、いくつもの歴史認識上の大きな転換や飛躍があって、（カッコなしの）世界史へと徐々に「成長」してきていると考えるべきであろう。

そのような「成長」を可能にした歴史認識上の転換や飛躍の要因としては、多くのことが考えられるが、その主要なものは、「下からの圧力」と「外からの圧力」であるといってよいであろう。「下からの圧力」とは、ごく普通の生活人、勤労者（労働者）や農民の側からの異議申し立てであり、「外からの圧力」とは、非西欧世界の側からの異議申し立てである。

「下からの圧力」としては、フーリエなどに始まる「空想的社会主義」、プルードンに代表される無政府主義（アナーキズム）、マルクス主義、ロシアのナロードニキ運動、などが挙げられるであろう。これらの思想と実践・運動を通して、ごく普通の生活人のもつ歴史や時間に関する感覚が、しだいに、知識人によって理念的に構成された「世界像」の中にまで浸透して、それを大きく変質させていった

と考えられる。

「外からの圧力」としては、非西欧世界における、反植民地主義的、民族的運動とそれを支えた思想が挙げられる。19 世紀にインドネシアや中国やインドや朝鮮などで勃発した叛乱（ジャワ戦争、太平天国、1857 年インド大叛乱、甲午農民戦争、義和団など）には、多くの反動的な要素が見られ、これらの叛乱がそのまま後の反植民地主義的、民族的運動につながるわけではない。しかし、ともかくも、アジアの多くの人々が植民地主義的侵略に抵抗したということは、西欧近代に対する異議申し立てとして、一定の歴史的意味を持ったといえるであろう。19 世紀末になれば、さまざまな地域で反植民地主義的、民族的運動が大衆的基盤を持ち始め、その中で、インド人イギリス下院議員D・ナオロージーの「富の流出理論」のような、植民地主義批判の理論も提起され、大きな影響力をもつようになっていった。これらの、植民地化された側における運動と思想が、西欧近世に淵源する「世界史」に直ちに衝撃を与え、その変質を迫ったということはいえないとしても、20 世紀になれば、そのような「世界史」が自足していることのできない状況を生み出したということは確かである。それは、歴史学の分野では、さまざまなユーロセントリズム批判の形を取って現われた。

もう一つ、「下からの圧力」とも「外からの圧力」とも言いにくい圧力として、フェミニズムの思想と実践を挙げることができる。女性の側からの異議申し立ては、特に 20 世紀後半に大きな力となって、「世界史」に自省を迫った。

結論的にいえば、このような諸圧力を受けて、西欧近世に淵源する「世界史」はしだいに変質を迫られ、徐々に、多くに人々に受け入れられる（カッコなしの）世界史に「成長」してきているということができると思う。その過程は未完であり、さらなる努力を必要とするとしても。

3　世界史を構想するということ

「第 13 章　実証主義的『世界史』」で指摘されているように、実証的歴史研究（いわゆる実証主義 positivism とは無関係なものとして）と世界史の構想とは全く次元の違う問題である。

E・H・カーは「すべての思考というものは、経験に基づくある種の前提を認めねばならない」として、それを「仮説」と呼んでいる（『歴史とは何か』84 頁）。実証的歴史研究の場合も、ある種の「仮説」を必要とするのであるが、世界史を構想するという場合の「仮説」は、実証的歴史研究に必要な「仮説」とは全く次元の違うものなのである。

カーは、世界史的次元の「仮説」の例として、ウェーバーとマルクスのそれを挙げている。ウェーバーの「仮説」というのは、いうまでもなく、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」との間の関係性ということであるが、マルクスについては、「挽臼はわれわれに封建領主の社会を与え、蒸気製粉機はわれわれに産業資本家の社会を与える」という言葉を引用している（同、85 頁）。要するに生産力（挽臼、蒸気製粉機）と生産関係（封建制、資

本主義）との間の関係性ということである。

マルクスは、生産力と生産関係との間の関係性の変動に歴史発展のダイナミズムあるいは「法則性」を求めた。すなわち、ある生産関係の中で生産力が一層発展していくと、いずれ、既存の生産関係を桎梏と感じるようになり、その生産関係を突き破っていくことになる、という「仮説」である。この「仮説」は 19 世紀という時代を生きたマルクスの「経験」に基づいている。西欧封建社会が崩壊していく中で、資本主義的生産関係が発展し始めた時代、その資本主義の本源的蓄積過程で析出された無産者たちや下層労働者たちの悲惨な社会状況、それはマルクスが身をもって「経験」した歴史過程であった。無産者たちや下層労働者たちの悲惨な社会状況は、遠からず、資本主義的生産力の一層の発展にとって桎梏となって、過剰生産をきたす、それが恐慌を引き起こして、資本主義的生産関係そのものを崩壊に導く、というのがマルクスの見通しであった。

このマルクスの見通しは、今日から見れば、あまりにも短兵急なものであったと言わなければならない。しかし、ここでは、それが問題なのではない。問題の核心は、独自に世界史を構想するということは、このような次元の「仮説」を必要とする荒業、力技なのだ、ということである。その点で、『「世界史」の世界史』の「総論」にいう「オルターナティブの世界史」とは、そのような壮大な次元の「仮説」によって、世界史を新たに構想しようとするものなのであろうか？私には、それらを「オルターナティブの世界史」などと称するよりも、２で述べたような、「世界史」をより豊かな（カッコなしの）世界史に「成長」させていくための努力として理解する方がずっと生産的なように思われるのだが。

「世界史」再構成の課題

松本彰（新潟大学名誉教授）

『「世界史」の世界史』の合評会では活発な議論が行われ、現在の歴史学、歴史教育をめぐるさまざまな問題に発展し、多くのことを考えさせられた。ここでは当日の議論をふまえて『「世界史」の世界史』について、さらにそれに関係して、筆者の関心で、気になっていることを書かせていただくことにした。

『「世界史」の世界史』の序論は、南塚信吾「「世界史」の世界史」で、この本の二部構成について説明している。上原専祿の問題提起を参照しつつ、「ここで問われるべき問題は、なぜヨーロッパの「世界像」のみがその後に「世界史」へと発展したのかということ」であり、ヨーロッパにおける人類という観念、連続する時間という観念が、「ヨーロッパの「世界像」を「世界史」に発展させる契機になった」とし、「啓蒙主義」以降のヨー

ロッパでの歴史学の発展、そして最後に最近の日本での議論をとりあげている。

具体的には、第一部「さまざまな世界像」で、11 章にわたって、さまざまな文化圏の「世界像」）が問題にされ、第二部「近現代の世界史」の 7 章は、近代以降の「世界史」の諸問題が扱われている。

第一部の諸地域の多様な「世界像」の分析では、これまで知られていなかった問題も多く紹介されており、第二部も力作の論文が多く興味深かった。「世界像」と「世界史」による二部構成といっても、実際には、重層的、多角的な問題意識が組み込まれている。もっとも、最初、この目次構成を見て、読み始めたときには、伝統的なヨーロッパ中心史観そのままではないとはいえ、戦後日本での世界史の出発点にこだわりすぎて、複雑な問題を単純化してしまっているのでは、とも思った。しかし、その後、パトリック・マニング（南塚信吾 / 渡邊昭子監訳『世界史をナビゲートする』（彩流社、2016 年）などを読み、現在、日本で、「「世界史」の世界史」を問うためには、「世界像」と「世界史」の関係こそが重要な分析課題となる、という本書の問題提起は理解できた。この本は、「世界史叢書」と名付けられたシリーズの総論として最初に出された。今後、シリーズの各巻で多彩な問題がより深められていくことを期待する。

21 世紀になって、世界史は歴史研究者だけの問題ではなく、多くの学問分野で意識され、議論が発展している。以下、三点、筆者の関心から、最近のトピックを紹介しておきたい。

1）歴史と啓蒙

「歴史と啓蒙」について、ユルゲン・コッカ（肥前栄一 / 杉原達訳）『歴史と啓蒙』（未来社、1994 年、原書は 1889 年刊）がある。コッカは 18 世紀啓蒙について紹介することからはじめつつ、その後に「啓蒙の名が与えられたあの時期における、啓蒙と歴史の内的関連についてのコメントはこれ位にしておこう。だがそれから 200 年たった今日、この考察はどのようなものであるべきだろうか？　我々が今日まったく異なった状況の中で生きていることを、誰も疑うことができない」として、「我々が著述しているのは、1788 年ではなく、1988 年であり、現代を啓蒙の時代から隔てている深刻な相違を見落とすのは単純すぎる」（213 頁）として、ナチズム後の、「啓蒙の弁証法」が問題にされるようになって以降の歴史学と歴史意識について分析している。この本の原著がドイツで出版された 1989 年は、フランス革命 200 年を記念する年であるとともに、「ベルリンの壁」崩壊の年であり、翌 1990 年に東西ドイツは統一された。それからすでに四半世紀以上、世界は激動の時代となり、ドイツ、ヨーロッパ、世界諸地域の歴史学と歴史意識も大きく変化した。

2015 年 1 月に、ゼバスティアン・コンラート（ベルリン自由大学）が来日し、研究会で「グローバル・ヒストリーにおける啓蒙」について報告し、議論する機会があった。そこではアジア、日本の啓蒙についても問題にされ、多彩な議論ができた。コンラートは、コッカ先生の弟子で、私は 1991 年 10 月から一年間、ベルリンに留学したおり、コッカ先生のゼ

ミで、そして日本学の日本史ゼミで共に学んだ。コンラートはその後日本に留学し、日本史の専門研究者として、またトランスナショナル史、グローバル史の専門家として活躍している。日本史を研究している外国の歴史研究者も増えており、国際的に日本を含めた世界史について、多彩な議論が可能な時代になった。日本でも、笠原賢介『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界』（未来社、2017 年）など 18 世紀以降のヨーロッパの「世界像」と「世界史」を根本から問う研究が出されている。

「歴史と啓蒙」の問題は、「歴史と教育」と関係する。現在の日本で、世界史教育での問題が重い意味を持つことを、今回の議論でもあらためて強く感じたが、啓蒙の多義性と連続性は世界史を考える上で、重要なテーマであろう。

2）文化史とメディア、音楽の世界史

最近では世界史理解にとって、政治、経済、社会以上に文化が注目されている。1 月 21 日に早稲田大学文化人類学会の「「アート」―社会実践と文化政策」をテーマにしたシンポジウムに参加した。記念碑やアート・フェスティバルなど、以前から関心を持ってきたテーマで、文化人類学、民族学、民俗学の方々と議論でき、興味深かったが、世界史的な視座をふまえて議論することのむずかしさも感じた。

文化、そして文化史の発展は、メディアの発達と深く関係している。記録として残された文字記録、文字史料を中心にしていた歴史学も大きく変貌せざるをえない。とくに音楽と音楽史にとって、19 世紀末以降の録音再生技術の発達の意味は大きい。民衆の音楽文化としてのポピュラー音楽、そして非ヨーロッパの音楽文化の研究としての民族音楽研究も盛んになった。ヨーロッパ音楽史においても、バッハ以前の「古楽」を「古楽器（チェンバロなど、19 世紀以降用いられなくなっていた楽器、オリジナル楽器、ピリオド楽器）」で演奏することが広く行われるようになり、演奏習慣の研究が活発化した（大崎滋生『音楽演奏の社会史－よみがえる過去の音楽』東京書籍、1993 年）。最近では、インターネットの発展によって、音を含む動画の記録、再生、伝達がより容易になり、歴史意識もそれによって変化しつつある。そのような中で、「音楽の世界史」の研究が進んでいる。

マックス・ヴェーバーが 1910 年から 1913 年ごろに行った、音楽の基礎構造としての音組織の整律における「合理主義」と、その「社会学的」分析は草稿として残され、1920 年に没した翌年に刊行された。日本では、『音楽社会学』として知られ、議論を呼んできた。小林　純「ヴェーバーの音楽研究について」『ドイツ経済思想史論集 III』（唯学書房、2015 年）は、社会科学者ヴェーバーがなぜ、このようなものを書いたのか、このテキストがヴェーバー理解にどう生かせるのか、ドイツで 2004 年に刊行された全集版のテキストを元に問うている。

ヴェーバーの研究から 100 年が過ぎた。藤枝守は、『響きの考古学―音律の世界史』（音楽之友社、1995 年、増補版：平凡社、2007 年）で、整律の元となった「音律の世界史」を問題にしている。ヨーロッパ音楽においても「古楽」の演奏では、歴史的音

律が用いられるようになっている現在、このような研究は実践的にも重要な意味を持つ。より具体的に音楽と社会との関係を世界史的に分析した研究として、たとえば上尾信也『歴史としての音 ― ヨーロッパ中近世の音のコスモロジー』（柏書房、1993 年）、塚田健一『アフリカ音楽学の挑戦』（世界思想社 .、2014 年）、同『『文化人類学の冒険―人間・社会・音楽』（春秋社 .、2014 年）なども、「音楽の世界史」への果敢な挑戦的として、注目される。

3）地域史と国民史を超えて

3 月 29 日に、東洋大学で、「今、歴史的ヨーロッパを問うこと―『礫岩のようなヨーロッパ』と世界史」と題された研究シンポジウムが行われた。古谷大輔 / 近藤和彦編『礫岩のようなヨーロッパ』（山川出版社、2016 年）はヨーロッパ近世をテーマにしているが、この本について、西洋史、東洋史、日本史の報告者、コメンテーターが発言し、世界史的に問題を明らかにしようとした企画で刺激的だった。世界史を問題にする上で、ヨーロッパ中心史観の克服、さらに世界史において、地域、民族、国民の歴史をどのように歴史的に問題にするか、とくにヨーロッパ史における国民国家形成をモデル化しがちなヨーロッパ中心史観の克服は依然として重い課題であり、そのためにも「ヨーロッパの特殊性」について、世界史的に議論する必要があることをあらためて感じた。

今後、世界史研究所が、世界史について、多彩なテーマを取り上げてくださることを期待している。

『「世界史」の世界史』を読んで：若干の感想

深澤安博（茨城大学名誉教授）

私は第 I 部「さまざまな世界像」は拾い読みし、第Ⅱ部「近現代の世界史」はなんとか読み終え、合評会の場にかけ込みました。それで、第 I 部の各執筆者にはたいへん申し訳ないのですが、第 I 部についてはほとんど触れずに、本書の簡単な感想を記すことにします。

第Ⅱ部の第 12 章「啓蒙主義の世界（史）観」は出だしからわかりやすい書き方で、また最近の理解の仕方についても言及していて、大いに参考になりました。第 13 章「実証主義的「世界史」」と第 14 章「近代日本の「万国史」」では、「「国民史」と「世界史」の相補的な関係」、また 20 世紀初頭に国史（日本史）・東洋史・西洋史の「三層構造」に至る過程とその諸問題がよく跡付けられていると思いました。第 15 章「マルクス主義の世界史」は、マルクス（またエンゲルス）の諸著作や関連文献を読んだことのない読者でも、その「世界史構想」、スターリン時代のソ連での「五段階発展論」の定式化、戦後日本の歴史学のマルクス主義の受容の仕方がよくわかるように書かれていると見ました。

第13章～第15章の各章は、主に日本における近代以降の世界史観をほぼ理解できる構成と内容になっていると思いました。

第15章について一言すると、マルクス主義者を自認するホブズボーム（など）の近代史・現代史（あるいは同時代史）の見方、とくに革命派・抵抗運動やその組織また社会変容のあり方などの理解の仕方も、1960年代後半以降、日本の歴史研究と交錯するところがあったのではないでしょうか。ホブズボームの著作の多くが日本語でも読めるということ自体が注目すべきことです（ソ連時代には自らの著作はロシア語に翻訳されることがまったくなかったと、ホブズボーム自身が述べています）。

第16章「世界システム論」では、「世界システム論が果たした歴史的役割」と過去形でとらえられていることに、この章の筆者の見方がよく表れていると読みました。

第17章「現代日本の「世界史」」では、高校での歴史教育、大学での歴史教育と専門研究（後者では「世界史教育の不在」）が一体のものとして論じられています。「[高校世界史]教育と[大学]入試のすべてが[世界史]用語集の周りを回るこのしくみ」との指摘は実情を示していると思いました。「世界史叢書」にこのような内容の章があることは大いに意味のあることです。

最後の「総論　われわれが目指す世界史」では当然ながら、これまでの世界史研究上・世界史教育上の多くの「問題点や限界」が俎上に載せられており、多くの論点が提示・吟味されています。今回は、「グローバル・ヒストリー」（第17章では、グローバル・ヒストリーの展開について、日本の学界では「拒否感が強い」と書かれています）について日ごろ私が感じていることを一言。グローバル・ヒストリーはヒト・モノ・カネ・情報などの質や量の世界的な動きについて画期的とも言える視角と実証研究の成果を示した。他方で、様々な時期に世界の各地域の人々（その権利を得た場合には主権者）がどのような主体的（あるいは非主体的）な対応や選択をおこなったのかということへの関心が弱いのではないか。

全体として、第Ⅰ部では「世界像」からのアプローチ（第Ⅰ部のタイトルになっている）、第Ⅱ部では「世界（史）観」からのアプローチが基調になっていると読み取れました。

私は学生時代に旧版「岩波講座 世界歴史」（1969年～1971年、「総目次・総索引」は1974年）を月に一巻ずつ購入し（各巻1,000円、生協割引で900円）、それらを通読して（けっこう熱心に読んだことを覚えています）歴史学を学んだ世代に属します。新版「岩波講座 世界歴史」（1997年～2000年、各巻3,000円＋税）は通読するというより、必要なときに読み、また大学の演習や論文指導の際に使いました。今回の「世界史叢書」（予価5,500円＋税）はどのように読まれ、また使われることになるのでしょうか。また数年後に議論しましょう。

『「世界史」の世界史』コメント

百瀬宏（津田塾大学名誉教授）

『「世界史」の世界史』を拝読し、さまざまな主体が生んできた世界像が明らかにされていることに感銘しつつも、どの方の議論についても、その展開の「場」として措定されているもの、恐らく「地域」だろうと思いますが、その性格の明確化をお願いできないものかと、思い続けていました。

「地域」は、近年、国際政治学の方でも問題になってきているような気がします。日本国際政治学会という研究者組織は、第二次世界大戦直後に誕生したのですが、成立当時は、国際政治学者と地域研究者の相互協力体制の下に発展しまして、私のような院生が研究発表をしますと、両方の先学者から絞られたものです。それはそれで有難かったのですが、近年になりまして、国際政治が展開する場としての地域というものがクローズアップされてきまして、そういう議論が進んできているように思われます。こういう「場」としての地域というものが、方々で浮かび上がってきているように思われてなりません。何か、お役に立てば、と思って発言しました。

『「世界史」の世界史』合評会—歴史教育からの視点

松本通孝（立正大学非常勤講師）

はじめに

合評会では、第Ⅰ部と第Ⅱ部との接続の問題、イスラーム世界の記述についてなど今後の同シリーズの方向性をめぐる貴重な意見が出された。それら評者によるコメントで触れられなかった点について、一歴史教育者としての意見も有用ではないかと思い、ホームページに投稿させていただきます。

今までの歴史観から何を継承するか

私が大学に入ったのは 1960 年代の前半、高度成長の初期であった。それまでのいろいろな価値観が動揺していく中で、歴史というと受験の日本史・世界史しか頭に浮かばなかった私にとって、最もショックを受けたのは夕暮れ迫る大教室にて近代社会への移行に関する分析を「科学的」に説かれていた大塚久雄氏の講義であった。それは同時に後進性を色濃く残していた日本社会への提言でもあった。その背景にはマルクス主義的な歴史観に裏打ちされていたことは言うまでもない。

「マルクス主義の世界史」については、本書で小谷汪之氏による分析及びその限界とともに戦後日本の歴史学への影響の分析が論じられており、大いに学ばせていただいた。1967 年に大学を卒業して以来、世界史・日本近現代史の教師として 40 数年間勤

務してきた一歴史教師としては、私たちの世代が大学時代に必死に学び、歴史教育への応用を試みてきた当時の歴史の捉え方が、現在どう評価されるのであろうかに関心がある。私は、新任の歴史教師として、歴史を学ぶことは固定的な事実の暗記ではなく、社会は常に矛盾をはらみながら変化してきたし、その歴史の変化の原因・経過・結果を、いろいろな要素をまな板に載せながら考えていくのが歴史教育の面白さであると説き、様々な史資料を教材化しながら生徒にぶつかってきた。歴史学と歴史教育との接点を求めての実践の連続であった。

その後、1970 年代に入り、社会主義的な試みの行き詰まり、さまざまな運動の挫折、またマルクス主義的な捉えかたに対し、歴史学の中からも西欧中心主義批判、社会史的な見方の有用性などが説かれ始め、何よりも日本がＧＮＰ世界第２位になることによって、日本の後進性意識が薄れていったことも相俟って、マルクス主義的な「科学的」な捉えかたの後退、そしてソ連崩壊により社会主義は２０世紀を代表する政治思想の一つと看做される傾向が定着してきた。では、マルクス主義、大塚史学から学ぶものは、もはや何もないのであろうか。私は本書に望む要望として、マルクス主義のみならず、実証主義史学、社会史などから、何を学び、継承していくべきかを啓示していただきたいと思い読み始めたのであるが、いずれの史観についても、現在および将来の歴史的な捉え方に対し、何を継承すべきかの視点が弱い、或いは欠けているのではないかというのが私の意見であります。

21 世紀の今、近現代史を捉える視角は

2016 年 12 月、中央教育審議会は答申を発表し、その中で高校の歴史教育について、必修の「歴史総合」と選択の「日本史探究」「世界史探究」の３科目の創設をあげている。その中で中教審は「歴史総合」において「近代化」「大衆化」「グローバル化」という視角で、日本と世界の近現代史を捉えようとする姿勢を打ち出したのであるが、本書執筆の方々はどう思われているのであろうか。『「世界史」の世界史』という題名からして、本書は世界史を、或いは世界近現代史をどのような視角で捉えようとしているのかに興味を魅かれた。その問に対応するのは、「序論」と第 17 章、最後の「総論」の３つの章が該当すると思われる。しかし、それらを読んだ限りにおいては、ヒントらしきものは随所に語られてはいるが、具体像がなかなか見えてこない。中教審の方でも、学問的な裏付けのない歴史の分析方法について多少の躊躇が出てきているとの情報も聞こえてくる。世界史研究所としても、これからの世界史、特に日本及び世界の近現代史の捉え方に関する分析視角について、学会の意見の集大成を図る好機ではないのだろうか。

現在、世界情勢を俯瞰してみると、洋の東西を問わず、極端な自国・自民族中心主義、移民・難民や異質なるものの排斥、将来に負担を押し付ける現状肯定主義にあふれている。そのような日本および世界の現状を相対的に且つ歴史的に把握する科目として、「世界史」を学ぶ意味は以前に増して深まっていると思われるし、また「歴史総合」は位置づけられて然るべきと思われるが、その分析視角は

「近代化」「大衆化」「グローバル化」で事足りるのであろうか。

かつて、世界史未履修問題が起こった時、世界史研究所のホームページに大学・高校教員が打開の方向性を提言したことを思い出す。今また、世界史研究所として、世界史教育、近現代史教育に対する提言をまとめる方向は出せないのだろうか。

以上２点にわたり、合評会に出させていただいた高校の歴史教育に長らく携わってきた教師の一人として、感想と提言をさせていただきました。今後のシリーズの中で、それぞれ歴史学の専門の立場からの提言を期待したい。

『「世界史」の世界史』コメント

吉嶺茂樹（北海道有朋高等学校）

吉嶺です。やはり東京に行くことが出来ないようです。それで以下の文章を書いてみました。現場の教員として､北海道で生活している教員としてこう読んだ､ということです。

1

「世界史の世界史」の中で「アイヌ史」を語る場合に、二重のことを考えないといけないと思います。

（０）もそもアイヌ史に関する言説を「世界史」のコンテクストで歴史学的に比較して書いた本は無い。多くは日本史の枠組みの中で日本史とアイヌ史との関わりの中で書かれてきたか、こうしたアイヌ史が同時代の東アジア史の中にどのように位置づけられるかという文脈で書かれてきた。この点で本書はこれまでにない視点を明らかにしたものであり高く評価できる。その上で、アイヌ史を考える場合に「世界」という言葉の使い方には注意を要する。

それは以下に関わる。

（１）アイヌの「世界観」が「世界」史の中でどう位置付けられるかという視角(これが坂田さん。彼女は口承文芸を歴史学的にやっているので)

（２）世界史のコンテクストの中で「アイヌ史」がどう描かれていたのか（これを私は指向している）

もう少し言うと、「世界観」（世界をどうそれぞれが認識するか＝向こう側から）と「世界史の中の位置付け」、近代史とか、植民地論とかポストコロニアリズムとか、とをごちゃごちゃに考えると分からなくなる（隠れてしまう）ことがあると思うのでこれを整理してどちらの議論なのか（上か下かではなく）を明快にする必要がある。

2

私は(２)のことを考えたい人間なので、例えば世界史の中の民族言語回復運動や文化復興運動の中にアイヌ史や、特に現在の若者たちが関わっている文化復興運動などがどういう関係になるのか、の歴史を描くことで「世界史の世界史」の中での「アイヌ」の

特殊性と普遍性があきらかになるのではないかと思っています。

そうすると、スウェーデンのスコーネとかカナダのメイティとか、つまりサーミやイヌイットやマオリなどのさらに下のレベルの民族史・民族誌とどういう関係になるのかということを描くことが出来、それを北海道の生徒が知ることで、何でアイヌでもない（と思っている）生徒たちがアイヌ史を勉強しなければならないのかを考えるきっかけになるのではないだろうかと考えています。

同時に、こうしたアイヌ史に関する言説の問題は、他の隣接諸分野の学問（言語学・文化人類学・民俗学 etc…）を世界史という授業の枠組みの中で生徒に考えてもらうための絶好の素材となりうると思います。そうすると、アイヌ史の問題は、別に北海道の生徒だけが考えるべきものではなく、広く日本社会で「民族」問題を考える素材となり得ると思っています。つまりアイヌ史という問題を単なる民族解放運動に結びつけていくことではない、もっと違う提示の仕方があり得る、ということです。その可能性を追い求めていかない限り、おそらく現場においてアイヌ史の実践は広がっていかないのではないかと思っています。限られた授業時間の中で取り上げるには面倒くさい問題だ、というレッテルをはられてしまうからです。

2 『「世界史」の世界史』書評と紹介

澤野理（神奈川県立寒川高等学校）

2006 年に明らかとなった「世界史未履修問題」は，歴史教育や歴史研究に関わる者に対し様々な問題を投げかけた。それは，世界史ではなく日本史の必修化の是非であるとか，用語の暗記を中心とした教育方法に対する批判であるとか，大学の研究と教科書の記述との乖離であるとか，広範な分野にわたっていた。これら，制度や方法論をめぐる個別の議論がなされる一方で，従来の「(高校) 世界史」の枠組み自体を再検討する動きも，少しずつではあったが着実に，大学・高校双方の立場から進められてきた。再検討の主たる課題は，「日本史」と「世界史」との分断をどのように解消すべきかということで，その過程で『大人のための近現代史 19 世紀編』(東京大学出版会，2009)，『市民のための世界史』(大阪大学出版会，2014)，『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える—』(ミネルヴァ書房, 2016) など意欲的な概説書が刊行されてきた。そして，これらの成果を一段掘り下げた研究書として「MINERVA 世界史叢書」(全 16 巻) の刊行が始まった。

本書は，その総論にあたり，人類が各地域に描いてきた世界史像を読者に示し，それらの中からいわゆる近代 (西欧的) 歴史学がどのように成立し，そこにはどのような問題点があったのかということを論じている。第 I 部では，「さまざまな世界像」という表題で，日本・中華 (中国)・古代インド・「周

辺国」(日本・朝鮮・ベトナム)・ギリシア・キリスト教世界(中世ヨーロッパ)・イスラーム世界・アイヌ・メソアメリカ・サン(ブッシュマン)を取り上げ，各々の世界像を概観している。ここでは，諸地域の多様な世界観を改めて認識するとともに，これらの世界観が風土や言語・宗教などで区分される「閉じた」地域内で専ら形成されたものではないことに気づかされる。つまり，時代とともに諸地域間の接触と交流が進む中で得た他地域からの新たな知見を，ある時は，自身の世界像を補強するために利用し，またある時は，自身の世界像を修正する拠り所としていたのである。前者の例としては，江戸期の国学者として有名(日本史用語集の頻度⑧)な平田篤胤が皇国の至上性を説明するに際し「ノアの洪水」を援用していることがあげられる(第 1 章)。また，後者の例としては，イエズス会士がヨーロッパに持ち帰った中国史によって聖書に依拠した年代研究の修正に結びついたことがあげられる(第 6 章)。続く第Ⅱ部では「近現代の世界史」という表題で，啓蒙主義の世界観・実証主義的「世界史」・近代日本の「万国史」・マルクス主義の世界史・世界システム論・現代日本の「世界史」とほぼ時系列に沿った形で歴史学の諸潮流を概観している。中でも，マルクス主義(第 15 章)以降，編者の一人である桃木至朗氏による「現代日本の「世界史」」(第 17 章)，編集委員会による「われわれが目指す世界史」(総論)にいたる部分は，現役の高校教員が大学で学んできた，そして高校教科書の記述で慣れ親しんできた「歴史(世界史)」の枠組みを批判的に再確認する際の指針となるであろう。

高校教員にとって，本書は，具体的な歴史的事項(事件)に直接触れていないという点で，また，「これが新たな世界史像だ」という明解な結論も示されていない点でも，いささか難解に感じられるかも知れない。しかし，研究者がどのような枠組みで「新たな世界史」を考えているかということに無頓着なままで授業に臨めば，どのような授業技法を用いたとしても，「自身が学生(高校生)時代に学んだ世界史を繰り返し教えるだけのお気楽教師」になってしまうのではないか。我々は学者ではないのかもしれないが，単なる DVD メディアでもない。そのようにお考えの先生方には，ぜひ一読をお奨めする。

(一般財団法人神奈川県高等学校教育会館県民図書室発行「共同時空」No.97 より転載)

合評会を終えて

南塚信吾(世界史研究所所長)

合評会では、今後世界史(日本史と区別された意味での「世界史」ではない)を考えていくうえで重要な諸問題がいろいろな角度から提示されて、『「世界史」の世界史』という本の編者の一人としてというよりも、世界史を考えている歴史家たちの一人として、今後に取り組むべき諸課題を改めて認識させていただいた。自分の教訓のためにメモしたものを、以

下に簡単に記しておきます。

本書の個々の記述やそこで示された事実については、足りない点が多々あることは否定できません。その点の批判が比較的少なかったのは、評者の皆さんが本書の趣旨をよく理解して下さっているからだと思われます。そのうえで、本書の基本的な狙いについての問題がいくつか出されました。

一番の問題は、本書の第Ⅰ部と第Ⅱ部との関連です。その点をめぐる問題の一つは、「近代」以前の世界の諸地域に見られた種々の「世界観」の中から、ヨーロッパのそれが「近代的」な「世界史」を作り出したのはなぜかという大問題ですが、これには、本書は問題提起をしているだけで、なんらその問題に答えていないと批判されました。これは、そのとおりです。本書では、いくつか示唆はしてみましたが、突っ込んだ研究がなされたわけではないのです。これは今後ますます意図的に取り組まれるべき大問題だと思います。この問題に関しては、松本氏も深澤氏も、ヨーロッパにおける「啓蒙主義」の意義に注目しておられたのは、重要な論点かもしれません。

また、この点で、小谷氏の指摘はとくに示唆的だと思います。氏は、近代以前の世界像のうち、ヨーロッパのそれが「近代」以後、世界史へと次第に「成長」したのは、それが「下から」と「外から」の圧力を受けてきた過程があるからであろうとし、こう述べています。

> このような諸圧力を受けて、西欧近世に淵源する「世界史」はしだいに変質を迫られ、徐々に、多くに人々に受け入れられる（カッコなしの）世界史に「成長」してきているということができると思う。

これには異論もあり得ますが、こういう思考こそが歴史研究として重要なことであり、そういう議論がさらに伸ばされていくことが必要だと思われます。

もう一つの問題も、難しい問題です。木畑氏の言を引用します。

> 各地域での世界像と近代以降の世界史像との関連は、本書の構成でいえば第Ⅰ部と第Ⅱ部の関連ということになる。そこで問われなければならないのが、第Ⅰ部で扱われた世界像が近代以降どのようになっていったのかという点である。序論では、「そのような「世界像」が、現在においても諸地域の人々の歴史観に依然として影響を与えているかもしれない。・・・これらの「世界像」は、まだ消滅はしていなくて、現在においても、なんらかの形で残り、おりにつけて登場してくるものでもある。」と記されており、さらに非ヨーロッパの世界像にあった価値を活かした世界史の構想の可能性も考えられているようであるが、それについての議論が十分に成されているとは思えない。

この批判はもっともです。ただ、わたしの知る限りでは、これまでこの種の問題は「提起」さえされてこなかったわけで。したがって、この一書に

おいて解決はとてもできないわけですが、言われるとおり、本書で「議論」を出来うる限りで行ったわけではないのです。

ここで問題となる「近代」以前の世界各地の世界像については、橋川氏がそれぞれに内在させて理解する試みをしてくださって、

> 各章が時に人類学など隣接諸分野にも踏み込んで論じたさまざまな世界史（像）理解からは、今日の歴史研究の主要なアプローチといえる「人間集団同士の接触」についてひと味違った洞察を得られる。

と述べておられます。また澤野氏は

> これらの世界観が風土や言語・宗教などで区分される「閉じた」地域内で専ら形成されたものではない・・・つまり、時代とともに諸地域間の接触と交流が進む中で得た他地域からの新たな知見を、ある時は、自分の世界像を補強するために利用し、またある時は、自分の世界像を修正する拠り所としていたのである。

という捉え方をして、そういう世界観の時代の世界史への展望を見出してくださっています。

ともかく、こうした「近代」以前の世界観（像）を今日の世界史がどう受け止めていくかという問題が突きつけられているわけです。

以上のふたつの問題とも、わたしが「序論」を書くに際して提起したものであって、編集会議でしっかりと議論したわけではありませんでした。いわば「やってみて分かった」ということです。

最後に、今後の世界史の構築の道としては、なんらかのグランドデザインを示すよりも、「個別研究に裏打ちされた全体像」(日高氏) として世界史を追求していくべきだという考えが参加者の多くから提起されていました。吉嶺氏がアイヌから世界史を構成できないかと問うのも、その一つでした。国民国家といった単位のみで世界史を考えるのではなく、百瀬氏の問題にされた「地域」といわれる諸単位も、そういう試みの中で考え直されていくことになるでしょう。これは、本書のみではなく、本書に始まる本シリーズ全体で考えて提起していくはずのものですが、本書においてそういう指針というか示唆がもっと明確に示すことができていればよかったかもしれません。

ともかく、本書を公にして初めて明確になったり反省させられたりした問題が多くあったわけですが、それだけ、世界史を考えるには、今後にやるべき仕事がたくさんあるということを認識させていただきました。世界史研究所の課題もいよいよ大きなものになってきてると痛感した次第です。

最後に、今回の合評会にご協力くださったみなさまに、心からお礼を申し上げます。

『新しく学ぶ西洋の歴史』合評会

南塚信吾（世界史研究所所長）

南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史』（ミネルヴァ書房、2016 年）の合評会が 2017 年 3 月 18 日に大阪大学文学部の歴史教育研究会において開かれ、南塚も編者の一人として、秋田茂さんとともに、これに参加した。合評会は、今後「西洋の歴史」をどのように考えていくべきかという問題について、大いに参考にすべき点をいくつか提起する会となったと考えるので、ここで、紹介してみたい。

合評会では、森本慶太（大阪大学大学院文学研究科助教）、冨田暁（岡山大学客員研究員）、久保田裕次（大阪大学大学院文学研究科招へい研究員）の三人の方が中心的なコメントをされて、そのあと、フロアーから自由な発言があった。三人のコメンテイターはそれぞれ丁寧に読んで、正確な批評をしてくださり、本書の趣旨を積極的に評価してくださった。つまり、本書が、①古代・中世・近世・近代というヨーロッパに発する時期区分を拒否している点、②西洋の歴史を日本・アジアから見るという主体的な視線、そして、③日本・アジアと西洋の歴史を「関係」で考えるという方法、のいずれもが従来の「西洋史概説」と違った、本書のユニークな特徴であると、積極的に評価してくださった。

このようなコメントに対して、編者としてのわたしは、本書は、日本やアジアに住む人々が、なぜ「西洋」の歴史を学んだり研究しなければならないのかを、今の時点で考え直してみようという問題を提起しているということを再確認し、本書については、いわゆる「日本史」の人が喜んで「序論」を引き受けてくださったことを指摘した。また、ヨーロッパ史が古代・中世・近世・近代という時期区分を経て、内発的に発展してきて、世界史の柱となったといった認識の方法は、何としても克服しなければならないのだということを強調した。

大枠としては、このように本書の趣旨は評価していただいたが、合評会では、さらに、その趣旨をいっそう高いレベルで実現していくために乗り越えるべき点について、いくつか重要な批判もあった。それぞれの批評に逐一答えることはできないので、三者に共通する問題や、とくに取り上げたい問題について以下に整理してみたい。

1．時期区分について

本書は、古代・中世・近世・近代というヨーロッパ発の時期区分を拒否しているが、事実上、近世以後の時期しか扱っておらず、古代・中世にあたる時期をどうするのか。

古代・中世についてもアジア・日本との「関係」で西洋の歴史を論じていけるのか、という批判が強かった。

これについては、秋田茂さんからも発言があったが、今日、日本の西洋史研究において古代史や中世史はどういう問題意識をもって研究をしているのかという

反省がなによりも大事であろう。そういう反省から現在の西洋古代史・西洋中世史の枠を崩していけば、アジアなどへの繋がりの道も見えてくるのではないかと思われる。同じことは、アジア史や日本史にも言えることであろう。そして、たとえば、「８世紀の世界」といった見方も試みられているように、「古代」や「中世」なりに新しい世界史像を描けるようになるかもしれない。

２．各時代のタイトル（章題）の意味

本書は近代について、フランス革命、第一次世界大戦、第二次世界大戦、ワシントン体制などのタイトルを使わないで、「蝦夷の彼方」「韓国併合」「１２か条」「シベリア出兵」「満州」などを章（時代）のタイトルに掲げているが、それによってどういう時代的な意味を主張しようというのか、という批判があった。

これについては、フランス革命、第一次世界大戦、第二次世界大戦、ワシントン体制などのタイトルはすべてヨーロッパ中心に世界を見たときの視角を体現しているということを反省しなければならないだろう。そうではなくて、アジアの側からの世界を見るときには別様に見えるのではないかということを模索するタイトルを、使ってみた。もちろん「蝦夷の彼方」が時代を表わすタイトルではないが、「フランス革命」は同時代にはアジアではほとんど知られていないし、影響も少なかったことを反省する意味にもなると考えた。

３．「アジアから」の意味

本書は「アジアから」と言っているが、「アジア」が活きていないのではないか。日本については意識されているが、日本以外のアジアは活かされていないとの批判が強かった。たしかに、「アジアから」というのは最後に付けた副題であって、本書の最初から意図されて編集に活かされたわけではなかった。しかし、アジアを活かすとはどういうことか。

日本以外のアジア諸国の諸関係や内部の諸問題について西欧はどういう意味を持ったのかは、従来研究されている。そういう問題を引き起こしたのは西欧のどういう側面なのかという視角が欲しいということか。

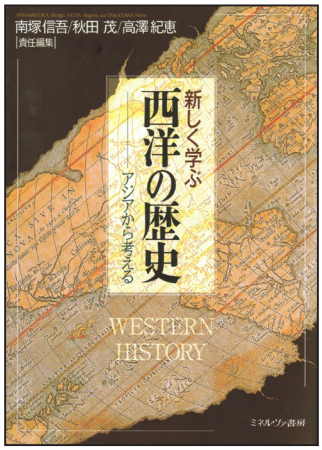
４．「関係」でどこまでいけるか

まずは、本書は「関係」を鍵としているが、それは近代以後については可能だが、近代以前は「関係」で構成できるのかという問いがあった。たしかに、そう見えるが、「関係」をさまざまなレベルで考えるならば、道はあるように思える。政治的・経済的な「関係」だけでなく、「噂」や「口承」や「もの」や「イメージ」など、さまざまな層の「関係」を見ていくことで、かなり可能なのではないか。

もう一つ、西欧とアジアの「相互作用」をもっと生かすべきであったという批判が注目された。欧米のアジア政策だけでなく、それへの反作用をもっと追究すべきだ。西欧がアジアを包摂したことによって、アジアはもちろん、西欧自身が受けた影響・変化を突き詰めるべきだとの指摘があった。

たしかに、わたしの思うに、19 世紀以降についても、アヘン戦争以来のアジアのさまざまな「抵抗」にたいする西洋での反応、西洋へのインパクト、あるいは、種々の世界恐慌の中でのアジアと西洋の関係などがもっと問題にされてもいいし、ヨーロッパでの「国民国家」の形成がアジアとのどういう関係のなかでなされたかなども、重要な課題となりそうである。

この他にも重要な論点はあったが、主な点は以上の諸点であったかと思われる。いずれにせよ、今回の合評会を経て、日本・アジアから見た西洋の歴史だけではなくて、日本・アジアからみた世界史（日本・アジアを含んだ意味で）が求められているという感を深くした次第である。



RIWH アフリカ奨学基金　（第 5 期）授与の報告

皆さまの篤志に支えられ、「RIWH アフリカからの世界史賞 RIWH Award for World History from Africa」（第 5 期）の給付を、2017 年 4 月より開始することができました。ご寄附をお寄せいただいた皆さまには、厚くお礼申し上げます。前回同様、ナイジェリアのイロリン大学人文学部歴史および国際研究学科において、受給学生の募集と同学科の先生方による選考が行われました。論文審査の結果、受賞者として以下の 3 名の方が決定しました。

Benson Moses Okorogbudje さん (28 歳)

Temilorun Elizabeth Ale さん (19 歳)

Peter Oluwafemi Idowu さん (23 歳)

受賞者の方には、賞状と奨学金 1,500 ドル (USD) を送りました。授賞式の模様は下のとおりです。ご寄附をお寄せいただきました皆さまには、改めて深くお礼申し上げます。

5 年間にわたり、活動して参りました RIWH アフリカ奨学基金は、今回の第 5 期の授与をもって、当初の予定通り活動を終了致します。ご寄附をお寄せいただきました皆さまには、改めて厚く御礼申し上げます。

RIWH アフリカ奨学基金（第 5 期）受賞者のみなさん

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2017 年 09 月 16 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.npo-if.jp/riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	鈴木 健太（東京外国語大学特別研究員）
	山崎 信一（東京大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学特任助教）
	崎山 直樹（千葉大学特任講師）
	鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員	稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
	近藤 正憲（学術博士）